

～第一志望校合格に向けて、まくとうそーけーなんくるないさ～

君たちは沖縄地方で使われる「なんくるないさ」という方言を聞いたことがありますか？多くの生徒は聞き覚えがあると思いますが、この言葉は日本語の標準語では「なんとかなるさ」という意味で使われています。また、「現在の困難も時間が経てば解決する」、「深刻になりすぎず、楽観的に構えよう」という前向きな意味でも捉えられています。さらに、沖縄の伝統や生活哲学に根ざした言葉でもあり、自然や周りの人との調和を大切に、穏やかに生活することを重視する文化を象徴した意味でも理解されているそうです。しかし、「なんくるないさ」は決して「何もしなくていい」という意味ではなく、本当は「なんくるないさ」の前に、「まくとうそーけー」という言葉がくつつくっているそうです。

この「まくとうそーけーなんくるないさ」には私が沖縄に行った際、複数の深い意味があることを現地の人から教わりました。進路にも関係があると感じた内容もあったので少し紹介したいと思います。一つ目は「受け入れる心の大切さ」です。これは困難な状況でも過度に悲観することなく、現状を受け入れながら前向きに進む姿勢の重要性を示しています。すべてが自分のコントロール下にあるわけではないという考えを受け入れる心の柔軟さとも言え、苦しい時だからこそ必要な考え方だと思います。次に「助け合いの精神をもとう」です。沖縄には「ユイマール」と呼ばれる助け合いの文化があります。「なんくるないさ」の背後には、「みんなで助け合えばきっとなんとかなる」という信念も込められているようです。受験は団体戦と言う人がいますが、私は基本的には個人戦だと考えています。しかし、集団の作り出す空気感が個人のパフォーマンスに大きな影響を与えていることには共感します。だから、「助け合う精神」というか「お互いを高めあう、応援しあう」雰囲気の醸成はとても必要だと考えています。さらに、「自然と共生する思想をもとう」です。沖縄の人々は長年、自然と共に生きる暮らしを大切にしてきました。「なんくるないさ」には、「人間がすべてを支配するのではなく、自然の流れに従い、無理せず適応する」という意味合いが含まれることがあるそうですが、これは西高に入学したこと、大学でどこに進学したのかということと関係があると思います。私はそれぞれの生徒が最大限努力した後は、決まった進路に対する宿命を潔く引き受け、上手く適応することが重要だと思います。そして、最後に「未来への希望をもとう」です。これには「今は困難でも、いつかは良くなる」という楽観的な信念も含まれています。ただし、楽観一辺倒ではなく、「そのためにできることを少しずつやる」というアクションを前提とした言葉で、むしろこのアクションこそが重要だと思います。3年生はいま、辛い状況にあるはずですし、むしろないのはまづいですが、辛くても、誠実に前向きに努力していれば、自然とあるべき良い状況になると信じています。是非、「まくとうそーけーなんくるないさ」の精神で最後まで受験をやりきってください。

さて、毎年、この時期になると、今年度の受験環境と志望動向がある程度はつきりしてきます。そこで、各予備校、業者のデータを参考にしながら分析したものを報告したいと思います。ただし、この中には、共通テスト後に大きく変動する可能性がある内容も含まれていることを念頭に読んでください。

1 2025年度入試に関するトピック・変更点

- ・18歳人口は2021年度入試から減少してきました。昨年度は2万人減少の107万人でしたが、今年度は3万人増加の110万人となっています。しかし、2023年度入試以前の数値と比較すると変わらず低い水準にあり、入試競争が厳しくなっているとは考えられないのではないかと思います。
- ・模試では国立・私立ともに指数103と同様の増加傾向となっており、偏りは特にはなさそうです。ただし、私立大学については共通テスト利用方式の指数が108と高くなっているため安易な共通テスト利用方式への出願は避けるべきだと考えています。

(裏面へつづく)

- ・注目される変更点としては、国の大学・高専機能強化支援事業の影響で情報系学部の新設、定員増です。この事業は中長期的な人材育成の観点から、科学技術・イノベーション基本計画等の政府全体の戦略・方針に掲げられているデジタル・グリーン等の成長分野の学部等の設置等に必要な資金に充てるための助成金を交付するもので、全国各地における当該成長分野の学部等の設置等を促進するために多額の補助金が投入されています。そして、これらの学部系統は文系・理系いずれから受験できる入試科目が設定されているのが特徴です。
- ・後期日程の廃止、総合型・学校推薦型選抜の拡大が進んでいます。主な後期日程の廃止としては京都工芸繊維大、神戸大(医・保健看護学)、長崎大(薬)などがあり、総合型・学校推薦型選抜の新規実施の主なものとしては総合型選抜では東京学芸大(教育)、名古屋大(理)、長崎大(環境科学)、学校推薦型では千葉大(情報・データサイエンス)などがあります。
- ・女子枠を実施する大学は増加傾向にあり、今年度入試でも千葉大や神戸大などが女子枠を新規に実施します。今後も女子枠導入の動きは広がると予想しています。ただし、大学によっては志願者が募集人員に満たないケースがいくつかみられるようです。

2 大学入学共通テストについて

- ・昨年度までの4回の共通テストで出題形式・傾向・分量は固まってきたような印象です。大学入試センターが考える「思考力・判断力・表現力等」は「情報処理能力・資料の分析力、速読力」と理解して問題ないと思われますし、授業などの場面が設定されて、生徒が学習する場面や社会や日常生活において想定される出題、会話文などは今後も継続されると考えられそうです。さらに、試験時間に対する設問の長さや問題量の多さも変わりそうもないです。
- ・今年度の大学入学共通テストの出願についてですが、大学入試センターから発表された出願締切最終日の出願総数は495,171人で、昨年度より+3,257人と7年ぶりの増加となりました。また、現役生の中で共通テストに出願した割合を示す現役志願率は45.5%で、前身の大学入試センター試験が始まった1990年以降、最高となり益々現役生中心の入試となりそうです。
- ・今回の共通テストは、新しい学習指導要領に対応した試験となり、出題教科・科目の変更などがありますが、1・2年生の為にも確認していくと国語は解答時間が80分から90分に、配点20点の「実用的文章」が新設され、5大問構成に変更されます。次に地理歴史・公民は必履修科目を組み合わせた出題科目1つと選択科目を組み合わせた出題科目5科目の合計6つの出題科目から最大2科目を選択解答することになりました。数学は数学①が全問必答に変更され、数学②で出題範囲にCが加わり、解答時間が70分に変更され、B・Cの4分野から3つを選択解答することになりました。理科では従来の「理科①」、「理科②」を一つの試験時間帯の中で「理科」として実施されることになりました。そして、「情報」が受験教科として新規追加されますが、全体として共通テストにおける受験生の負担は明らかに増加することとなり、受験体力も大きな合否のポイントとなりそうです。

3 総合型・学校推薦型の状況について

- ・令和7年度入学者選抜において「総合型選抜」を実施する予定は国立大学が69大学で全体の85%、公立大学は56大学で全体の58%、募集人員は国立大学で7522人、公立大は1721人となっており、一般選抜、学校推薦型選抜を含めた募集人員全体の7%を占めています。
- ・「学校推薦型選抜」では国立大学が76大学で全体の94%、公立大学は97大学で全体の99%で実施され、募集人員は国立大学が12,294人で公立大学が9,551人で募集人員全体の17%となっています。この「総合型選抜」「学校推薦型選抜」の二つの区分は、「年内入試」と呼ばれるケースがあり、今年度は国公立大学全体で31,773人、24%を募集している。なお、「一般選抜」の募集人員の割合は前期日程で62%、中期日程で2%、後期日程で12%となっており、中期・高期日程が徐々に減少してきてます。

今回はここまでの報告とします。模擬試験における全体動向や各大学の個別状況については、難関大学と近隣の大学を中心に次号で報告したいと思います。

(文責・松村)